

第 76 回 IEEJ エネルギーセミナー開催報告

本報告は、上記シンポジウムの議論の内容を(一財)日本エネルギー経済研究所の文責でまとめたものです。内容の全て又は一部を無断複写・複製・転載・譲渡することを禁止します。

2015 年 1 月 9 日、日本エネルギー経済研究所において、「ビジネス面から見た LNG 市場のダイナミズム (The dynamism of LNG markets as seen from the business front)」の報告会を開催した。LNG-Worldwide ディレクターのパトリシア・ロバーツ (Patricia Roberts) 氏に講演していただく場として開催し、100 名近い参加者が集まった。

報告会では、主として 2020 年までの LNG 市場の見通しについて説明があった。主な内容は以下のとおり:

グローバル LNG 産業は、2015 年から 2020 年、ダイナミックな変化の段階に入っている。中でも世界最大の LNG 買主であり続ける日本が LNG 市場に大きな影響を与え続ける。原油価格低迷・不安定が短期的には地域間価格差縮小方向に作用するが、新規 LNG 生産投資判断に影響する。投資が進まない場合には 2020 年以降の LNG 市場のバランスに影響する。短期的に進むと考えられるのは、米国の追加案件、可能性が残るのは、パプアニューギニア、インドネシアの拡張設備、カナダ、東アフリカの案件である。

供給面では、この期間に年間 1.35 億トン相当の新規供給力が稼働開始する。そこには、伝統的な合弁事業型売主、買主が出資参加しその出資分相当の生産物を裁量する方式 (3000 - 4000 万トン)、LNG 引き取り買主にキャパシティを販売する米国の液化事業 (4500 - 7000 万トン) といった異なるビジネスモデルが共存、相互に競争する。その同じ期間中に、既存の長期 LNG 契約年間 5200 万トン相当分が期間満了となり、その売主達は更新するか、一部を国内市場に向けるか、フレキシブルにマーケティングするか、選択することとなる。このふたつの相互に関連のない事象が、LNG 対 LNG の大きな競争を生み、買主達が LNG を購入する際、評価すべき新たな選択肢、新たなリスク、そして成果を提供することとなる。2020 年までに世界の供給プールは年間 4 億トンに拡大し、短期市場の性質が変化する。

需要面では、日本、韓国で原子力動向が LNG 需要に影響する。中国が最大のミステリーであり、石炭とパイプラインガスが影響する。一方インド、インドネシアが価格感応性の高い市場として浮上し、従来の信用力があり高価格で購入する市場を当てにしてきた LNG 生産者達が戦略変更を迫られる。

こうした生産能力の拡大とともに、市場も 2020 年までに 30% 拡大する。LNG グローバル市場の流動性、LNG 取引における新たな商業型ビジネス環境がもたらされることとなる。アジアの LNG ハブが必要かということがよく質問されるが、「よりダイナミックなアジアの価格」という意味ならば、その方向にある。

日本の LNG 産業にとり、上記の変化は概ね有利に機能するが、対応の変化も必要となる。流動性が拡大することにより、短期の需要変動への対応は柔軟化する。長期需要に不確実性はあるが、最大買主としてのポジションを活かすことができる。一方で供給をダイナミックに管理していくため、リスクマネジメント、ポートフォリオマネジメントが重要となり、単なる買主ではなく、時には売主となる必要も出てくる。